

も過言ではないだろう。昔話および昔話の語り手への畏敬の念の喪失もそれと関係し、昔話の命數を一気に縮めているように思われる。伝承文学や南島の伝承に造詣の深い福田晃氏は、歴史的文脈からみた伝承の衰退について次のように述べている。

神話にしても、伝説・昔話にしても、それなりにかけがえのない秀れた文化であるが、それにもかかわらず、その伝承が頽れてゆくのはなぜか。云うまでもなく、その伝承のそれが、社会の現実的 requirement に、十分応えられなくなつたからである。言いかえるならば、それぞれのもつてゐる思想が必ずしも、その現実社会に単純には応えるものではなくなつたということである。

〔総説・民間説話〕『民間説話 日本の伝承世界』

昔話のもつ思想、世界觀が時代に適応できなくなつたとするのは同感である。伝統的な語りをそのままの姿で保存継承することは不可能である。時代が作り上げてきた固有の方法・形態は、時代が葬り去っていくのが自然の筋道ということになるのかもしれない。

(はなべ・ひでお)

シンポジウム・口承芸術の未来

伝統的な語り(Ⅱ)

川 森 博 司

一、囲炉裏の場の消滅とともに失われたもの

厳密に言えば、昔話は必ずしも囲炉裏のまわりでばかり語られたわけではないが、ここでは囲炉裏の場を伝統的な語りの伝承を象徴するものとして、話を進めることにしたい。祖母や祖父から孫へ、あるいは、母や父から子へと伝統的な昔話を語り伝えた囲炉裏の場は、戦後日本の高度経済成長のなかで、失われていった。つまり、昔話の伝承の基盤が根こそぎ奪われてしまったわけであるが、この囲炉裏の場の消滅とともにわれわれが失つたものは何か。この問題を引き受けることから、考察を進めることにしたい。

囲炉裏の場が失われていく状況のなかで、多くの熱心な研究者による昔話の聞き取りがおこなわれ、「昔話は生きている」という感動をもたらしたことも事実である。囲炉裏の場が失われても、昔話の伝承は語り手の記憶のなかに、たしかに生きていた。この事実が

あるからこそ、われわれは「伝統的な語りからの継承」という課題を設定することができるのであるが、その際に、われわれが時代状況のなかで失つてしまつたものを考察の前提としてしつかりと見据えておくことが重要であり、そこから設定すべき課題も見えてくるものと考えられる。

思想家の藤田省三は、「或る喪失の経験—隠れん坊の精神史」（初出 一九八一年）という論稿において、このような「喪失の経験」をじっくりと振り返つて確認する必要性を述べている。藤田によれば、高度経済成長の時代を経てわれわれが失つてしまいつつあるのは「生き方についての価値や基準」であり、それを失つた社会は、個人個人が自立しながら関連しあうという自律性を保つことができない。そういう状況において、まがいものの価値観にわれわれの意識がすくい取られていく危険性が生じるのである。

生き方についての精神的骨格が無くなつた社会状態は十分な意味ではもはや社会とは言い難い。一定の様式を持った生活の組織体ではないからである。それはむしろ社会の解体状態と言つた方がいい姿なのである。そうして、そういう時にこそ得てして社会の外側から「生活に目標を」と与えてやろうという素振りをもつて「國家のため」という紛いの「価値」が横行し始める。（藤田 一九八二・一〇）

藤田によれば、まがいものの価値観の侵入に対抗できる「生活組織と生活様式の独立性」を支える経験の基盤にあつたのが、「隠れん坊遊び」の世界であり、「おとぎ話」の世界であつた。したがつて、隠れん坊の場とおとぎ話の伝承の場が失われていくという事態

は深刻であると言わざるをえない（それは、マスメディアの影響とともに車社会の浸透が大きな要因をなしている）。藤田（一九八二・一五一一六）は次のように述べている。

心身一体の胎盤が備わっていないところには経験の育つ余地は先ずないと言つてよい。そういうところでは、経験となるべき場合においてさえ、そこから一回きりの衝撃体験だけを受け取ることになるであろう。だとすれば、おとぎ話と隠れん坊、話と遊戯の統合的対応が失われている状態を放置することは取りも直さず経験の消滅を促進することに他ならないであろう。

ではここで、藤田のいう「おとぎ話」、つまり、昔話の伝承は、より具体的にいえば、どのような役割を果たしていたのだろうか。そこで鍵になるのが、「ありしかなりしかは知らねども、あつたとして聽かねばならぬ」という昔話独特の語り方である。このような語り伝え方のなかに藤田（一九八二・四四）が見ているのは、「此の世の中での超越」の契機である。言い換えれば、この世の現実のなかに根ざしながら、ユートピアを構想する精神の運動である。このことを、より実証的なレベルの昔話研究に即して検討してみるとことしよう。

一、伝統的な語りと都市伝説

武田正（一九九五・四八）によれば、昔話の受容には聞き手の年齢によって、段階的な変化がある。二、三歳の頃から動物を主人公とする動物昔話に子どもは耳を傾けるようになり、五歳頃から人間

を主人公とする本格昔話を興味をもつて聞くようになつてくる。武田（二〇〇〇・一五二）は、動物昔話を楽しむ年齢層の子どもたちは「目で見ることのできるものこそ自分の世界であると信じて疑わないのだが、そこにもう一つのこころの世界を加えるためには、事実譚よりは「フィクションが都合よい」と述べている。ここで「フィクション」と呼ばれているのは、「ありしかなりしかは知らねども、あつたとして聽かねばならぬ」という語り方のことである。昔話の語りの場においては、それを「あつたこととして」聞いて楽しむ。しかし一方で、それが「フィクション」であることを認識しているというあり方である。

武田（二〇〇〇・一五三）によれば、かつての村落社会においては、「五、六歳頃に聞く本格昔話などになれば、昔話を「フィクション」として受け取る心組が、すでにそなわっているから、「瓜子姫」が川を流れてきた瓜から生まれたという誕生譚は「文学的リアリティー」として享受できるようになつて」いた。これが藤田（一九八二・一二）のいう「一連の基本的経験に対する胎盤」に相当するものと考えられる。虚構の世界と現実の間を行き来することができる精神的な幅といつてもいいのかもしれない。

このような心組みの準備が現代社会においては難しくなつてきているのではないだろうか。なぜなら、圍炉裏端において長い時間かけて育まれた昔話の伝承の場が、高度経済成長を境として失われてしまつたからである。そのような事態を前提にして、口承文芸の未来を想像することが、本稿の課題となる。

現代社会においても、人々の集まりのなかで盛り上がるハナシはある。

都市伝説は都市生活、都市化現象の中での生活の現在を語るものではあっても、聞き手の子どもたちの未来を語るものではなく、子どもたちは大人の描く世界を聞こうともしなくなつたし、語り手の大人もまた、子どもたちに夢を語ることに躊躇することになつてしまつていることもある。この断絶の中で大人が子どもに語ることはなくなり、子どもは子ども同士で「語り」を創作する以外になくなつてゐる時代だとも言える。

都市伝説の語りは盛行している。しかし、だからといって、昔話は過去のものになつてしまつたのだから、都市伝説の研究へと移行すべきだということに、単純にはならないであろう。なぜなら、都市伝説によって、かつての昔話伝承がもつていた人間の存在に関わる根幹的な役割が果たされているわけではないからである。このような状況を考えると、現代の都市伝説も含めた、これまでの口頭伝承のあり方の分析から、未来へ向けての口頭伝承の可能性を模索することが、現在の研究者に託された課題となるであろう。

現代の都市伝説の流行とも通底する状況を、柳田国男は「世間話の研究」(初出一九三一年)において、次のように指摘している

(柳田) 一九九〇・五一〇一五二八)。「根柢において「何か変わつた話」を、聽こうとする態度」(奇事珍談に流れる傾向)が跡を引いており、「話というものは人の機嫌を取るもの、どこかおかしいところがあつて笑わせなければならぬもののごとく、解せられるような先入主ができる。そうして猪口才で少しく厚顔な男子のみが、罷り出て座を待つようになつて、情の濃やかな考えの深い人たちは、かえつてその所懐を微笑とささやきとの間に託することになつた。その一方で、「むやみに内証ばかりが発達し」、「それを知らずに過ぎると時勢におくれるような、心持ばかりが横溢している」。しかし、それは必ずしも不徳なことともいえず、我々の知りたいと思う事項がそのなかにかなり交じっているので、ある意味でやむをえざる状況である。これは「話術がやや偏った発達をしている」ためであり、世間話の本質を認識せずにこの状況を放置する限り、「まだ日本は不幸なるゴシップの国、流言蜚語の悪用せられる国として続かねばならぬだろう」と柳田は述べている。

われわれはここで、柳田が「不幸なるゴシップの国、流言蜚語の悪用せられる国」から脱却することを世間話研究の課題として掲げ

ている点に注目したい。藤田省三が指摘した「社会の解体状態」という状況において、ゴシップが流行し、流言蜚語が悪用されるのではないか。すると、柳田や藤田による口承文芸の考察は、未来のるべき社会の構築への展望につながつてゐることがわかる。

現在の都市伝説は、柳田が世間話に望んだような、一般の生活者

としての人間の需要を満たす十全な発達をしているだろうか。柳田が克服すべき状態として考えたように、やはり奇事珍談に流れる傾向が強く、現実のなかに足場を築くことができないのではないかだろうか。刺激の強い、物珍しい話を求めることも、ストレスの強い社会における「ガス抜き」としての機能を果たしていることは理解できる。しかし、それはその場限りのものであつて、しかも、どこかで誰かがうまくやつているのではないかという疑心暗鬼を生み、情報に乘り遅れまいと駆り立てられるばかりで、流れのなかに踏みとどまつて自分の足場を築いていく方向にはつながっていないようと思われる。このような状況に対し、柳田が「世間話の研究」で説いたように、都市伝説をはじめとする現代のハナシの十全な発達を方向づける努力が必要であるとともに、伝統的な語りにあつて現代のハナシには欠けている要素を検討していくことも重要な作業となるのではないだろうか。われわれはここで、伝統的な語りから何を引き継ぐべきなのかという課題に移つていくことにしよう。

三、語り手の人生経験と昔話

昔話は子どもの頃に聞かされるものであるが、昔話の語り手にすることは、通例かなり年をとつてからである。伝統的な昔話は、語り手の人生経験を基盤として語られる。人生経験そのものが語られるのではなく、人生経験をふまえた語り手の思いが、「ありしかしながらしかば知らねども、あつたとして聴かねばならぬ」という形式に乗せて語られるのである。したがつて、語り手と聞き手にとつて昔

話の意味は必ずしも同じではない。同じ昔話でも、人生のどの段階で聞いたり語つたりするかによって、その意味が変わつてくるからである。そのような側面の実証的な研究として、氏家千恵の「昔話の保存部分と自由部分に関する一考察」という論稿を挙げることができる。氏家はそこで「猿聟入」の昔話を例にして、子どもの頃に聞いた昔話の解釈が、人生の経験を経るなかで変化し、定着していく様子を、次のように述べている。

彼女は、なぜ親が子に理不尽なことを強制するのかを考えたにちがいない。そして、それはそうしなければならない必然性があるはずだ、親の愛情は疑うべきではないと結論づけたのだろ。そこには、子や孫を嫁がせた彼女自身の親としての思いや体験が反映されてもいよう。一方、嫁がせられる娘にも深い不安もまた語りの中に生きている。

こうした個人的な体験もふまえつ、彼女は、娘のつらさを承知で無理難題を強要しなければならない立場に立つ人物として父親をとらえた。父親は、すなわち教訓「親のいうこと（は聞くものだ）」の形象化である。そして責任と愛情の二律背反に苦しむ父親の心情に、教訓の内包する不合理性の克服を見出そうとしたのである。（氏家 一九九一・四〇一、カツコ内は川森による補足）

氏家は、「責任と愛情の二律背反に苦しむ父親の心情」に語りの力点が置かれていることを指摘している。人生を生きていくうえで直面せざるをえない「二律背反」、それにどのように対処していく

かということについての思いを、語り手は「猿聟入」の昔話の語りの形式にのっとりながら、伝えているのである。

ユング派の精神分析医であるアラン・B・チネン（一九九六・五四一五五）は、老人を主人公とする昔話を分析して、そこで示される課題が「年長者が若いころからの自分自身の超越的理想的を再体験し、それを世渡りの経験と統合し、若者に忠告や手本をあたえること」であることを指摘している。「どのように継承されるべきなのか」という問題に焦点を合わせると、人生のなかで直面せざるをえない二律背反を含んだ困難な状況の存在、そしてそれに対する関わり方といった問題を、年長者の人生経験のなかでのある種の納得をふまえて、フィクションの物語の形で語るということが、伝統的な昔話の語りから引き継いでいくべき要素なのではないだろうか。

その際に、本稿の冒頭で触れたように、囲炉裏に象徴される旧来の伝承の場は残されていない。生活の全体が変化しているなかで、昔のままの語りの場を復活させるということも極めて困難であろう。したがって、現代の状況に応じた伝承の場をどのようにつくり出していくかということが課題であるが、筆者はまだそれについての明確な見通しを得るに至っていない。ただ、口承文芸の研究者としては、伝統的な昔話の語りが中年や老年という人生の後半期においてどのような意味をもつのかという側面を検討していくことによって、語り伝える大人の側の動機づけについて照明を当てていくことができるのではないか、と考えている。そのようにして語り手の側の語る必然性を再発見し、確認していくことが、伝承の再生・社会の再構築につながっていくのではないだろうか。

〔引用文献〕

氏家千恵 一九九二 「昔話の保存部分と自由部分に関する一考察

—言語アキストの伝承における△解釈行為▽の意味—」、福田晃

編『日本文学の原風景』三八四—四〇五頁、三弥井書店。

武田正 一九九五 『昔話の発見—日本昔話入門—』岩田書院。

武田正 二〇〇〇 『山姥登場—昔話学への招待—』置賜民俗学会。

藤田省三 一九八二 『一九八一』[或る喪失の経験—隠れん坊の精神

史—]『精神史的考察』八—四五頁、平凡社。

柳田国男 一九九〇 『一九三一』[世間話の研究]『柳田國男全集（ち

くま文庫）』九・五一—五三〇、筑摩書房。

アラン・B・チネン（羽田詩津子訳） 一九九六 『一九八九』[成熟

のための心理童話（下）]早川書房。

（かわもり・ひろし／甲子園大学）

一 はじめに

現代の民話

米屋陽一

シンポジウム・□承文芸の未来

柳田國男は『遠野物語』序文に「目前の出来事なり」「要するにこの書は現在の事実なり」と記した。「現代の民話」＝「現代民話」を解こうとするときに、現代民話の「現代」と「目前の出来事」「現在の事実」は、かなりの部分で重なり合うことに気づく。

ひとつのハナシを近・現代史、近代化という流れの中に置いてみると、ハナンの歴史的な背景や歴史的な状況を押さえる必要性に迫られる。と同時に「現代」とはなにか、との問い合わせ軋拗につきまとう。

人びとは、日常生活の悲喜こもごもの中から、戦争、環境・公害問題、天変地異などの特殊な体験を通してハナンを発生させる。語り手の直接体験は、一人称語りの事実談として出発し、いずれは三人称語りに移行する。その一人称、三人称の語りは伝承民話（昔話